



(資料「疫病中の2020年の四旬節」の続き)

2020年祈りの日

主任司祭 マルコ・ターディフ

2020年4月1日



前回の「疫病中の2020年の四旬節」というメッセージの最後に、中止になった「祈りの日」のための黙想資料を送ってその利用方法を説明しました。今回は「祈りの日」の後半になるはずだった、同じ黙想して頂いた聖書の箇所についての私の解説を送ります。祈りの日のテーマは「回心」ですので、「原罪」「ユダの死」「ペトロの否認」の三つの聖書の箇所を通して、主はどのように私たちを回心に呼びかけておられるかを究めようとしてきました。

原罪：創世記3章1節～24節

創世記3章は象徴的な話です。りんごの木でも、なしの木でもない「善悪の知識の木」という表現はその象徴的な性質を表しています。でもこの箇所は象徴的な話を通して罪についての深い「真理」と「心理」を伝えています。罪とは何ものか、その本質は何だ、という罪の「真理」を伝えると同時に、どうやって人間が誘惑を受けてそれに陥るか、という人間の心の動きの「心理」も伝えています。

＜1節 蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」＞

2章16～17節では、主なる神は「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」と命じて言われました。蛇は「命じて」と言わないだけではなく、「善悪の知識の木からは」を「どの木からも」と、主の言われたことをわざと変えます。その時まで女は、その実を食べてもいい木々がいっぱいあったから禁じられた木のことをあまり意識しなかったのですが、蛇の間違った言い方を直すことによって禁じられた木のことを注目するようになりました。

＜2～3節 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」＞

女も主なる神の言葉を忠実に伝えていません。「命じて言われた」ことも「善悪の知識の木」のことも言わないだけではなく、「触れてもいけない」という表現を主の言葉に付け加えます。ここに女の微妙な心の動きが現れます。主は「命じて言われた」をただ「おっしゃいました」に言い換えることによって、その言葉をもっと軽いものにする反面、「触れていけない」を付け加えることによってその言葉をもっと厳しいものにします。女は思いを口にすることによって、心が更に動いて主への見方が変わります。主の言葉を、重みを欠いている厳しい言葉として表現したら、主が理に適わないほど厳しい方ではないかという邪推を抱くようになります。

＜4～5節 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」＞

蛇は主なる神の言葉を打ち消して、邪推している女に安心感を与えます。そして、主がそう言われたのは結局、自分の特権を人間に決して与らせはしまい、という下心を主に負わせようとする

ることによって、女の邪推を確認すると同時に、女が言わなかった「善悪を知る」という主の言葉を使うことによって、女の気持ちが変わっていると繕って、女の信頼を主なる神から自分に引きつけます。要は詐欺師のようなものです。

＜6節 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。＞

女の心は主なる神を邪推することから無視することになります。禁じられた木に注目することからそれに心を奪われることになります。主なる神の命令からも、今までの樂園での生活からも目を逸らして、蛇が言った「善悪を知る」ことに目が眩んで、それだけが手に入れなければ満足しないという欲に駆られます。

＜7節 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。＞

蛇は「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」と言いましたが、目が開けた二人が知ったのはむしろ「自分たちが裸であること」です。蛇の登場直前の2章25節では「二人とも裸であったが、恥ずかしがりしなかった」と書いてありますが、我を通したことによる心の変化で恥を感じるようになります。恥という気持ちは、人から悪く思われていないかと恐れることからくるものだとなれば、二人は「神のようになる」どころか、自己評価が周りの目によって左右されるようになります。

＜8～10節 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の中に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」＞

「主なる神が園の中を歩く」ことは普段のことだったとすれば、二人が今まで主なる神と親しく交わったことを指しているでしょう。でも誘惑に陥ってすっかり主なる神から目を逸らしてしまった二人は、主がまた登場したら命令に逆らったことが思い浮かび、心のやましいところを感じて恐ろしくなります。以前欲に駆られて我を通した二人は、今度恐れに駆られて隠れようとしています。しかし、主なる神は全てを見通しておられる（詩篇139編を参照）から、実際主に隠れようがありません。むしろ二人は、自分自身に主なる神を隠そうとして「主なる神の顔を避けて」主を見えないようにしたら、二人も主なる神から見られなくなるだろうと思込んでいます。

＜11～13節 神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなと命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」＞

主に隠れようとした二人は、主に問いかけられたら責任から逃れようとしています。アダムの答えは特にひどいです。「女が木から取って与えたので、食べました」と言って女のせいにするのではなく、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が」と言って主のせいにもしています。「あなたがそうならなかったなら、こうならなかったでしょうに」と言わんばかりの表現です。主が女を造り上げて連れて来られた時にアダムが大喜びで彼女を迎えたのに（2章21～23節を参照）ということも言えます。

<解説>

創世記3章をこうして読むと、罪の「心理」が見えます。罪に陥ってしまった経験のある人なら、同じような心の動きを自分にも認めるでしょう。

さて、罪の「真理」は何ですか。話の流れを振り返ってみれば、二人は誘惑されて（1～5節）罪を犯して（6節）恐ろしくなって罰を受けます（7～19節）。そしたら罪の真髄を掴むカギは、その罪を犯した場面を伝えている6節にあるでしょう。結局、主なる神の命令に従うより、「賢くなろう」という自分の欲望を選びます。

「賢くなろう」という欲望は、蛇が言った「神のように善悪を知るものとなる」ことです。「善悪を知る」とはどういう意味でしょうか。言葉として一番関連している箇所（申命記1章39節）では「乳飲み子や、まだ善悪をわきまえていない子供たちは」という箇所があります。その前後から考えたら、「善悪をわきまえていない」とは無邪気で責任のある判断がまだできない小さい子供を指しています。それなら「善悪を知る」人は成人した大人のことでしょう。でも「善悪の区別を知る」という意味ではありません。幼い子供でも「ダメだ」「いいよ」の違いがわかります。女もあの木から食べてはダメだとわかっていました。蛇が「神のように」善悪を知ると表現したことから考えたら、むしろ「主なる神から独立して神であるかのように自分のことについての判断ができる」という意味に捉えたらいいでしょう。「一緒にいた男」もそばでその会話を聞いて蛇の話に納得しましたが、結局、二人は主なる神が二人の自己向上を妨げている者だと思いついて主なる神の命令に逆らってまでもそれを追い求めます。

言い換えれば、罪の「真理」とは自分の思い通りにする為に主なる神との親しい関係から離れることです。それを選んだ人は高慢になります。「高慢の初めは、主から離れること、人の心がその造り主から離れることである。高慢の初めは、罪である。高慢であり続ける者は、忌まわしい悪事を雨のように降らす」シラ書10章12～13節。

高慢になった人間は、ある意味で江戸時代の大名のような存在になります。自分より強い者に屈しながら、できる範囲で自分の思いを通します。または現代の競争社会の中に生きる人のように、落ちこぼれにならないように、上位になるように必死に頑張ります。

この話からくるもう一つの問いかけは、「人間の自由は何か、何の為にあるか」です。

聖書全体から考えると、人間に自由が与えられたのは、人間が自由に愛する為です。愛は強制できるものではありません。人が自由に愛していなければ、本当の愛になりません。

主なる神は、愛をもって愛の為に人間を創造されました。人間が愛して愛されている時に特別な喜びを感じるのは、その為です。しかも、主なる神は、人間同士の愛の為にだけ創造されたのではなく、むしろ先ずご自身との親しい関係の為に創造されました。主に愛されて主を愛することは、人間の存在そのものの究極の目的であり、人間自身の最高の喜びです。カトリック教会のカテキズムはこのことをこう説明します。「神への憧れは人間の心に刻まれています。人間は神によって、神に向けて造られているからです。神は絶えず人間をご自分に引き寄せておられます。人間はただ神のうちにだけ、求めてやまない真理と幸福を見出します」（27番）。

これを考えたら、罪とは「自由の乱用」と定義することもできます。愛する為に与えられた自由を、好き勝手なことをする為に利用するなら、その目的から外れて自らを不幸にします。人間の体を不自然に動かすと体を壊す原因になるように、自由を乱用するなら心を痛める原因になります。

ユダとペトロ：「後悔」と「改心」と「回心」

原罪は現代の人間の責任ではありません。ただし、遺伝病のようにその影響を受けている現代の人間は、主なる神から離れた状態にこの世に生まれます。ご自分との親しい関係の為に人間を創造された主は、離れた状態からご自分のもとに連れ戻す為にイエズス・キリストを遣わされました。ただし、上記に書いたように、「人が自由に愛していなければ、本当の愛になりません」ので、キリストは人間を主のもとに連れ戻すには人間の自由に訴える必要があります。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」マルコ1章14～15節。「時は満ち」とは「主なる神が決定的に人間の歴史に介入される時が来た」という意味で、「神の国が近づいた」とは「原罪の前にあった、主なる神と人間の親しい関係が再び実現し始めている」という意味です。主の恵みの時を告げてから、キリストは人間にそれに応える決心「悔い改めて福音を信じなさい」を呼びかけます。

ここで「悔い改めて福音を信じなさい」の意味を掘り下げたいと思います。

ユダもペトロも重い罪を犯しました。でも教会はユダを最上の悪人と見なして、ペトロを聖人と仰ぎます。どうしてそんなに極端に違うかと言うと、結局ユダは罪を悔やみましたが、ペトロは罪を悲しみました。「悔やむ」とは「自尊心を傷つけられた時に生じる屈辱感を覚える」ことだとすれば、まだ自分に向けられて自分のうちにとどまる感情です。後で悔やんだ（後悔した）ユダは祭司長たちや長老たちに「私は罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言いましたが、父なる神に罪を告白しませんでした。福音を通して告げられた父なる神の罪びとに対する慈しみを信じないで絶望して自殺しました。ところでペトロはキリストを信じて愛していました。「主は振り向いてペトロを見つめられた」時、ペトロは自分が主に対してどんなようなことをしてしまったかを痛感して「外に出て、激しく泣いた」のです。主に向けられて主に対する感情です。「罪を悲しむ」とは自分自身のことより、自分が働いた悪のこと、自分が相手を傷つけてしまったことを悲しみます。「するのじゃなかった」と思うより「どうお詫びすればいいか」と思います。

ペトロは改心したと言うより、回心しました。「改心」は心を改めて行いを正すような意味なら、「回心」は心を回す、心の向きを変える意味です。現代人は、園で主なる神に隠れようとした二人のように、「主なる神の顔を避けて」主を見えないようにしたら、自分も主なる神から見られなくなるだろう思い込んでいます。現代社会を見れば全部は主なる神抜きにして動いていません。精一杯社会生活を送ったら容易に主なる神の顔を避け続けてずっと見えないようにできます。主は、前から自分を見つめれば横に目線を逸らしたり、横から見つめれば後ろに逸らしたりして、目線が合わないようにくるくる向きを変えます。もう癖になって自分も意識していないでしょうが、結局、主との目線が合うと何となく怖いのです。「住めば都」という諺が指しているように、人間にとって慣れた状態が心地いいものだから、その状態を変えてしまうのではないかと思われるものは何となく怖いわけです。「どこにいるのか」と声をかける主は自分に罰を下す為に探しておられると思い込みますが、実は主は光と喜びの世界に連れ出す為に声をかけておられます。

回心の問題は普通に考えているところにはありません。問題があるのは主の愛を受け入れるだけの勇気が私にあるかどうかということです。